
絶対彼女

根歩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

絶対彼女

【Nコード】

N7552Y

【作者名】

根歩

【あらすじ】

雪の降る夜、栗宮学は絶対のカリスマをもつ少女と出会う。

エブリスタでも掲載しています。

栗宮学の人外性

1

十二月二十八日 水曜日

栗宮 学

寒い。

昨晚から降り出した雪により、足場が不安定だ。

こんな寒い日の深夜に外出なんて、誰かに強制でもされなければ、絶対にしない。

それなのに、こうしてひたむきに深夜徘徊しているのは、十五分前に行われたジャンケンにより、二分の一の敗者に選ばれてしまったからだ。

敗者が夜食のカップラーメンを買いに行く。

そんな、罰ゲームつきのジャンケンだった。

そうして僕は今、二十四時間営業のコンビニエンスストアに向かっている。

黒いコートのポケットに手を突っ込みながら、防水加工の施された靴に雪の擦れる唄を歌わせ、ただひたすらに歩く。

雲に覆われた寒空からは、ちらちらと雪が舞い降りている。その雪を降らせる雲に遮られた月光は、僕のもとへ届かないので、心もとない電灯の光と、たまに通る車のヘッドライトだけが心のよりどころだった。

自宅マンションから徒歩二十分のコンビニまではもう少しだ。

コンビニにたどり着いたら、暖かい暖房の効いた店内で一休みしよう。帰りは缶コーヒのぬくもりを頼りに帰ろう。

そんな思いが僕の歩幅を大きくさせる。

右に曲がれば、コンビニまであと少し。
足が弾む。

心弾む。

角を曲がり、視界が開ける。

そこで、弾む僕の足は停止した。

人だ。

人がいる。

ダウンジャケットを着ているのと、明かりが乏しいせいで、男女の区別ができない。

でもそこに、確かに、質素なビニール傘をさして、独りぼっちで立っていた。

深夜という時間帯。

人が独り。

立ち尽くす。

不自然に思えた。

しかし、僕のような奴がいるのだから、別におかしなことなんて、何一つ無いのかと思ひ直す。

一瞬止まった足を再び前へ進める。

コンビニに向かうため、前方にたたずむ人を横切る。

僕にとっても、この人にとっても、認識としては、記憶に残ることもない、通りすがりの人になるはずだった。でも、それは僕の勝手な思い込みで、勘違いで、認識違いということだったんだろう。

「……ねえ」

響くアルト。女性の声だ。

呼び止められた。こんな冴えない男子高校生が、女性に呼び止められた。

「？」

疑問符しか出ない。

僕は動揺を隠せず、その場で時間が止まったかのように、静止することしかできなかつた。

声も出ない。

彼女は、こう続ける。

「こつち……向いて」

たぶん緊張していたからだ。僕は言われるがまま、頭を少しひねって、視線を彼女の目に合わせていた。

電灯だけの乏しい明かりだけど、至近距離だと彼女の顔がはっきり見える。

白すぎて、蒼白すぎて、心配になるくらい白い肌。朱色と言うには程遠い、青紫がかった唇。月も出ていないのに、月光に照らされ、輝いているような瞳。

そんな彼女は、どこか悲しそうな表情をしていて、儂げで　それ
でいて、美しかった。

完成されすぎていて、恐怖を覚えるくらい美麗だった。

可愛いなんて形容は、この人には合わない。

ただただ、ひたすらに美しい。
人間の美を追求したら、ここに行きつくのではないかと思っただけ
いだ。

一目惚れだ。

向いたら最後、目を合わせたら最後、視点を外すことができなくな
った。

歪むことも、緩むことも、曲がることも、伸びることも、縮むこと
もない糸で、瞳と瞳が結ばれてしまったような、そんな気分だった。
彼女はまた、その綺麗なアルトを響かせる。

「いいこと、教えてあげる」

初めて会った女性に、どうやら僕は、朗報をいただくことができ
るらしい。

期待して、その朗報を待った。

少し間をおいて、彼女の口は開かれる。

「あなたは　人間じゃないの」

走る衝撃。

否、それは、感覚的なものではなく、はっきりとした痛みを伴った、声。

聴覚ではなく、痛覚を刺激したその声は、僕の脳味噌に激痛と、『納得』の意思、ただそれだけを残して消えた。

存外、僕は人間ではないらしい。

案外と言ったほうが、適切かもしれない。どちらも同じ意味か……。まあいい。とにかく僕は、人間ではないらしい。

これが朗報かどうか、甚だ疑問ではあったが、僕には質問したいことが他にあった。

人間でないならば、僕は一体何者なのだろうか？

見てくれは、どこの誰がどう見たって人様のそれだし、ここ十年以上、人として生きてきた。

当たり前のように、人としての人生を、可もなく不可もなく全うしてきたと思う。

力の限り　とまでは言わないが、人並みくらいには、生きてきたのだ。

それでも僕は、人間ではないらしい。栗宮学の人外

一度は納得したものの、信じられなくなってきていた。

裏づけが、裏づけでなくとも、人外者なら人外者なりの身分が知れたかったのだ。

つまり　僕が何者なのかを、目の前の彼女に訊いてみたくなった。

「僕は、人間でないなら一体何なんだ？」

「幽霊」

放たれた声は今度は視覚で捉えることができた。

それは、一瞬の出来事。

彼女の口元で、放射状に広がった波紋は、急速に凝縮され、白銀の弾丸となって、僕の脳天を貫いた。

僕が気づいていなかっただけで、多分、最初の人外宣告のときすでに、この白銀の弾丸は僕の脳を貫いていたはずだ。

それは、三十秒前に受けた痛みと、全く同等の痛みを、今も受けて

いるという事実が教えてくれている。
一度目と同様、その声、否、弾丸は、激しい痛みと『納得』の意思を残留させた。

「そうか、僕は幽霊なのか……」

僕がそう述べた後、今なお離れない視線の先にいる彼女の表情は、絶望に引きつった。

凍り付き、動かない。瞬き一つしない。

それが、僕の責任なのかは分からない。

けど、彼女はその後アルトを響かせることもやめ、一切の動作を、生を、放棄してしまっているようだった。

もう、誰の責任かなんてことは、どうでもよかった。

目の前にいる人が、今にも自殺してしまいそうな顔をしている。その事実だけで、行動を起こす理由としては十分だった。

正しい選択　　だったんだろう。

最善の選択　　だったんだろう。

人として、道徳に反しない、選択を取れたんだろう。

あるいは全部、間違っていたのかもしれない。

僕は、彼女の冷たくなった手を握って、引いて、コンビニとは正反対の方向へ、僕の自宅へ、走り出していた。

それが、僕が僕であったがためにとった行動だと信じたい。

こうして僕は、人外者になった。

*

「はあ、はあ……た……ただいまー」

肩で大きく息をしながら、帰宅の挨拶を述べる。

十分間の激走を終え、無事帰還した。

「おお！　幻の塩バター味が俺を呼んでいる！」

リビングの方から内山の声がする。喜びと希望に満ちた、今の僕の耳には痛い声だ。

『お帰りなさい』より先に、そんな言葉が出てくることから想像すると、内山の奴、相当腹が減っているのだろう。

だがすまない内山。お前が目当てのカップラーメンは購入できていないんだ。

なかなか部屋に上がってこない僕を見かねたのか、内山はリビングから玄関が見える廊下まで、匍匐前進で身を乗り出してきた。

内山と目が合った。

その後内山は、脇に控える彼女を見て、もう一度僕を見た。

にやりと口元をゆがめ、含んだ笑みを見せた後、跳ね起きてリビングに戻った。

これはまずいと反射的に思った僕の体は、すでに内山の後を追っている。

「やめる内山！ 受話器を元の場所に戻すんだ！ 説明する。詳しい説明を十分ぐらい延々としてやるから、とりあえず110番だけは、やめてくれ！」

受話器を手中に収めた内山の背中に飛び込む。

「く、このっ……その手を放せ」

内山が手に持った子機をはがすため、指先だけの取っ組み合いになる。

内山が【0】のボタンを押し終え、子機の液晶部分には【110】の文字が記されていた。

この状態で通話ボタンを押されれば、僕は犯罪者扱いされてしまう。

だからその前に【1】のボタンを僕が押す。

文字表記は【1101】これにて警察にかかることはない。だがしかし、内山は、取り消しボタンをすかさず押し、その後高速に【110】の文字を復活させた。

通話ボタンに内山の指が掛かる……。スローモーションに映し出される光景の中、僕の拳は力の限り、子機そのものを叩き付けていた。

通話ボタンを押す一歩手前で、受話器はこたつの上に音をたてて、転がり落ちる。

僕はその子機をすかさず手にした。

危機一髪とはこのことか。

「カップラーメンはどこだ！ 俺を騙したな！ この詐欺師め！」

「お前の問題はそこかよ！ そんなに腹が減っているのか、お前は！」

僕はてっきり、連れてきた彼女について何か勘違いしたのだと思っただけけれど、どうやらそれは思い損だったらしい。

詐欺師の疑いを掛けられているだなんて思わなかった。

「家に何もねえから、昼に学食でカレー食って、そこから何も食べてねえのは、てめえも同じだろうが！」

頭に血が昇った内山の口からは、怒声と一緒に唾が出ている。

どうして、ここまで怒られなければならないんだ。

「ああそうだよ。僕だって腹減ってただよ！ けど、いろいろ事情があって買えなかったんだ！」

「いろいろだつて？」

内山はうるさい蠅はえを見るような、そんな顔で、一音一音、嫌味っぽく区切りながらそう言った。

「いろいろだ」

「で、そのいろいろな事情が、あの方ですか。カップラーメンの代わりに女を連れてきたわけですか……へえ……ん？」

そう言った後、内山は固まった。

内山は、自分が放った言葉を噛み締め、咀嚼して、把握して、反芻して、頭上に豆電球が写る程の、閃きと納得の表情を見せた後、再び僕から受話器を奪おうと、襲い掛かってきた。

「だからやめろ！ なんで今更気づくんだよ。そこらへんも含めて説明するから、僕の腕から手を離すんだ！」

僕は必死に抵抗しながら内山を説得する。

「だってこれ、拉致じゃね。誘拐じゃね。てか拉致監禁って重罪じゃない！ やばいじゃん！ かくまっている俺は共犯者なのか？ いやいや、でもすぐにでも警察にこいつを受け渡せば或いは……」
「だから、理由があるって言ってるだろ！ 人の話を訊けよ！」
「やめてください！」

この部屋では、聞き慣れない女性の声が響いたので、僕たち二人は、静止してしまった。

僕は内山と顔を見合わせてしまう。

一人の女性に二人の男が見事に制止された瞬間だった。

内山はこたつに座り直して、口元に手をあて咳払いをする。

「おっほん。分かった。話を聞こう。話を聞くくらいはしてやろう。その前にあの人が凍えてしまっただけは困る。こたつで暖を取ってもらいなさい」

指図するように玄関の方を指差しながら、こちらを見てくる内山。

「……お前は僕の何なんだよ」

「父親ですがなにか」

「お前の未来の息子に激しく同情する……」

「いや冗談は置いといて。彼女も交えて話を聞こうじゃないか」

「だから、なんで上から目線なんだ」

「カップラーメンを買ってこなかったのは、どこのどいつだ？ ええ？」

食べ物への恨みは恐ろしい。

「うー、すみませんでしたー」

「よろしい。分かればいいのだよ、分かれば」

腕を組んで満足げな表情を浮かべる内山。

内山様はどうやらかなりご立腹のようで、一触即発の状況だ。ここは素直に従うしかなかった。

僕は立ち上がり、廊下に戻り、その場に待機していた彼女に手招きをする。

彼女は来ない。当然といえば当然だ。

僕は仕方なしに、玄関まで出向いて彼女の手を取った。
彼女は何か諦めた様子で頷き、片手でゆっくりと靴を脱いだ後、
我が家に足を踏み入れた。
「おじゃまします」とそれだけ言って。

*

そんなわけで、一人の女性を前に、男子高校生がこたつを挟んで
正座しているという、非常に不可解な状況になっている。

何故だか正座するのには、僕も内山も賛成だった。正座しなきゃ
いけない空気が漂っていた。そして僕たちは空気を讀んだ。

女性が一人いるだけで、空気が張り詰めているのだ。

「ふいかんでも、ほうぞ」

どうやらそう感じていたのは、僕だけらしい。

「みかん喰いながら、みかんをお客様に勧めるなよ」

「だって空腹が、俺の手を勝手に……」

どうやら内山は、無意識下でみかんの皮を剥くという荒業を行っ
ているようだ。

確かに視点は目の前の彼女に釘付けで、手元なんて見ちゃいない。
それにしてもこの人、よく部屋が上がってくれた。男子高校生が
二人しか住んでいない、いや、二人も住んでいるアパートによく入
ってこれたと思う。感心してしまう。

なんて思いながら、回想をしていると、重大な過ちに気づいた。

ほとんど僕が強引に連れてきたみたいじゃないか！

頼まれたわけでもないし、生き別れた妹を発見したわけでもない。
でも、あそこに放っておいたら、いけないような気がしたんだ。

本当になんとなく、下手をしたら記憶から跡形もなく抜け落ちて
しまいそうなくらい、なんとなく。手を握って、強引に引っ張って
いた。

うーむ。

内山に説明するとか何とか言っちゃったけど、どう説明しようか。説明したところで、理由になってないとか言われちゃいそうだな。

彼女の発言次第では、僕が誘拐犯になる未来も遠くないだろう。

「まずは自己紹介からはじめましょう」

みかんを食べ終えた内山がいきなりそんなことを口走った。なんとか話は逸れるみたいだ。

願ったり叶ったりだな。

いや、根本的にはなにも解決してないんだけど。

「その前に、アイマスクって、ありますか？」

彼女は俯いたままそう言う。

「もうお休みになられるんですか？」

内山がまたボケなのか素なのか、よく分からないことを言っている。

「いや、そういうわけでは無いんですけど……」

「すみません。多分在ると思いますから、少し待っていてもらえますか？」

内山に呆れつつ、僕はそう言って席を立った。

「はい。ありがとうございます」

僕は仲間内でネタとして利用しているアイマスクが、自分の机の引き出しに在ることを期待し、その場所へ向かう。

目ぼしい引き出しを上から順に開け、三つ目を開けたところで、目当ての品を発見した。

案外あっさりが見つかったのだが、こんなデザインで大丈夫だろうか？

目が垂れている割に、睫毛が逆立っているという、なんとも言えないイラストがプリントされているのだが、まあ、これしかないのでは仕方ないだろう。

リビングに戻り、内山の隣につく。

先ほどから、リビングとか洒落た言葉を使っているが、実際は、

四畳半のテレビとこたつしか置いていない、畳の敷き詰められた、質素な一室である。

学生は基本貧乏なのだ。

これぐらいの見栄は見逃して欲しい。

「こんなのしかなかったんですけど、大丈夫ですか？」

「はい、目さえ隠せれば何でもいいので……」

どうやら目を隠したがっていたみたいだ。だから、さっきから俯いていたのか。綺麗な目をしているから、隠す必要なんてないと僕は思うんだけど。それはもう、目が離せなくなるくらい綺麗な目だったし。

けどまあ。

コンプレックスというのは、案外そんなものかもしれない。

自分だけが過敏に、そして異常に気にしていた、ということがよくある。

コンプレックスを語れるほど、僕は自分のそれについて悩んだことはないのですが、説得力に欠けるし、本気に悩んでいる人に失礼かもしれないが、少なくとも今回に限っては、気にする必要性は皆無だと思えた。

すべては思い込みと認識であって、考えが違えば感じ方も違う。

十人十色。

蓼食う虫も好き好き。

そういうことなんだろう。

彼女は、慣れた手つきでアイマスクをかけた後、顔を上げた。

やばい。吹きそう。

隣に座っている内山も、口に手を当てて、必死に笑いをこらえている。

通常美しい人が、こういうのを付けた時の破壊力は反則的だと思う。殺人的というべきだろうか。

ひとしきり笑いをこらえ、治まったあと、

「じゃあ、条件は整ったようなので、自己紹介を始めたいと思う」

内山がまた仕切り始めた。

「どうぞ、はじめてくれ」

僕は半ば投げやり気味に返事をして、何かの役（たぶん厳格な父親）を演じるのに徹している内山を受け流す。

「ではまず、俺の隣に座っている馬鹿は、栗宮学くりみやがくです。がつくん、がくちゃん、など多彩な呼び名がありますが、お好きなものをお選びください。また、馬鹿でも結構です」

淡々とそういう内山。

「自己紹介じゃなかったのか……」

僕は怒りをこめながらそう言った。

「馬鹿紹介でした」

「お前は喧嘩を売っているんだな？ そうなんだな？」

「わりいわりい。俺の紹介も、お前がしていいからさ」

悪びれた表情では決してなかった。どちらかという楽しんでいるやがる。

「じゃあ遠慮なく。えっと……隣に座っている変態は、いや馬鹿は、内山くん……っ！」

いきなり後ろから強い衝撃を受け、こたつに顔面を打ち付けた。痛い。

頭蓋骨が割れる。おでこから罫ひびが入りそうだ。

「内山じゃないからな、俺。あだ名で使うのはいいけど、内山じゃないから俺」

「……………」

こいつ、何を言ってるんだ？

「いや、そんなマジ顔で考えられても困るんだが」

「今までずっと、内山かと思ってたよ僕。そーいや、お前のフルネーム知らないな……」

嘘ではなく、本当に知らなかった。あるいは忘れている。普段内山としか呼ばないから当然かもしれない。

「おいおい、同居人。しっかりしてくれ。桜を見てから早八ヶ月じ

やありませんか。俺の名前は山岡権人だ。内山はあだ名だ」

「あつ思い出した」

そう言えばそうだった。

「それは、どうも」

「あつ 同時に、外山さんのことも思い出したよ」

「その名前は、俺の前で禁句だ。がくちゃん」

「お前もその呼び方やめる！」

仕返しに、後頭部をリアットする感じで殴りつける。

内山は鮮やかに、こたつに衝突してくれた。

これで、おあいこだ。つまりそれは仲直りということでもある。

だから内山は必要に反撃に及んではこない。

男子高校生の乗りは、僕もまだよく分かっていないが、仲がいいのだ。それだけは確かだ。

殴られたなら殴り返す。そのくらいの仲でないと、一緒に住むなんてできないだろう。お互い遠慮しかない、ぎすぎすした生活なんて僕は考えたくない。

「お名前をお聞きしてもよろしいですか？」

そう仕切り直す内山。

「あ、はい。桜井希と言います。希望の希と書いて、のぞみです」

「「いい名前だ」」

ハモった。

くそ、内山のやつ。

年上のお姉さんが部屋に上がりこんできたからって、高感度上げようと思いやがって。

まあ、自分も変わらないんだけど。

彼女は「ありがとうございます」なんて感謝の言葉を言っただけで、顔では少しも喜んでいない様子だった。

いや、表情に出ていないだけかもしれない。

無愛想というより、不器用という印象を受ける。

「桜井さん。どうして、あんな所にいたんですか？」

僕は内山の進行を無視して、単刀直入に尋ねてみた。

「だから、まず俺に状況を説明しろ！」

妨害する内山。

「やだよ」

食い下がる僕。

「じゃあ今すぐカップラーメンを買いに行け！」

「すみませんでした」

そこを突かれては勝てなかった。

呆気ない敗北。

どうやら、内山を避けては通れないらしい。

僕は観念して、この状況に至った理由を事細かに内山に話す。

勿論、心配でたまらなくなつて連れて来てしまったとか、もっと言えば僕の感情の揺れ動きに関することなんてものは一切言っていない。

事実だけを懇切丁寧に説明する。

コンビ二に行く途中、路地で彼女と出会い、そして連れて来た。

そうとしか、話せない。

「あー、学さん」

話し終わると、怪訝そうな顔をしながら、内山はそう言った。

「はい、何でしょうか内山くん」

なんか僕まで芝居がかつた返事をしてしまった。

「今話を聞いたただけだと、多分俺だけじゃなくて、万人が感じると思うんだけど……なんつていうかなー」

「何だ、はつきり言ってくれ」

「うーんとな、やっぱり、誘拐だと思っただよ。俺は」

事実だけを話したのだ。そりゃ万人がそう思うだろう。

そう思われても仕方ない。

だけど、反論の余地はある。

「……………内山、ときには事実以外のことにも目を向けないといけないんだ」

「学、そんなことを言っても、現実が変わらない」

「そうか内山。それは気づかなかったよ。ありがとう。感謝する……が、それでも、だ。懺悔はこの方に真実を訊いてからでも遅くはないんじゃないだろうか！」

僕は勢いよく桜井さんを指差した。

まだ芝居がかってしまっている。

僕には、彼女が僕の助けを求めているという確信があった。根拠のない自信があった。いや、だったら確信とは呼べないのか……。とにかく、ただならぬ雰囲気を感じたのだ。お節介この上ないかもしれないけど、助ける義務があったような気がしたのだ。

ただ それだけだ。

「ああ。ご本人が違うとおっしゃるなら、俺も納得してやる」

「ということで、桜井さん。僕の行った行為は誘拐でしょうか？」

「誘拐です」

やべ、犯罪者だ僕。

「学、そのまま動くなよ。今すぐお巡りさんを呼んであげるから。そう言いながら立ち上がるうとする内山の服を僕は引っ張る。

「ちょ、待て！ 話せば分かるよ！」

「話して分かったのはお前が犯罪者だということだ。いい加減罪を認めろ」

「いや、これは何かの間違いで、そんなはずは……おい！ 話せば分かるんだ！ 早まるな！ 受話器を置け！」

「……ぷっ……ふふふ……」

笑い声が聞こえて、僕はその発信源に視線を向ける。内山はというと、受話器を所定の位置に戻して、自分も所定の位置に収まった。視線の先には口に手を当て、笑いを堪えている桜井さんがいた。先ほどまで、鉄仮面を装っていた桜井さんがついに笑い出したのだ。

今の会話のどこに、笑いどころがあったのか、僕には理解し難いのだが、笑いの壺は人それぞれなんだろう。

これが思い込みと、認識の差だ。

僕と内山は、笑いを堪えながらも、堪えきれない桜井さんを不思議そうな顔で眺める。

「あ、あの、どうされましたか？」

「たまらず、そう訊いたのは内山だった。」

「……ふっご、ごめんなさい……ぷっ…… 同年代の人とお話なんて、本当に久しぶりだったから……ぐすっ……」

笑っていたはずの桜井さんは、いつの間にかすすり泣いていた。情緒不安定なのだろうか。アイマスクの下からは、涙が伝い、頬を濡らしていた。

でも、同年代と話すのが久しぶりってどうということだ？

「同年代って本当ですか！」

「おかしいな、突っ込みどころ間違っていると思うのは、僕だけかな……」

「お二人とも……、高校生ですよね」
軽く無視された。

「はい、ぴっちぴちの高一です！」

ぴっちぴちってなんだよ。ぴっかぴかの一年生みたいに言うなよ。お前は鮮魚か何かなのか？ 何か？ マグロなのか？ と、また無視されるのが落ちだろうと思って、声には出さず軽く突っ込みを入れる。

「なら、同級生ですねっ」

まだ泣き声だったが、それでも彼女は、満面の笑みを僕たちに見せた。

さっきの『誘拐です』発言は、恐らく彼女なりのジョークなんだろう。空気は確かに和んだ。

だから、今真面目な話に引き戻すのは、空気が読めていないと言われても仕方のないことだと思う。

それでも、だ。

「同年代と話す事が久しぶりって、どういことですか？」

僕はその質問をとめることができなかった。

なぜなら。

発言内容が不自然だからだ。

その要因から感じられる不安感が大き過ぎる。

僕たちと同年代、容姿端麗、人当たりのよさ、それらすべての要素を踏まえ考えるなら、同世代と話すことが久しいなんて発言は、あまりにも不自然すぎる。

常識的に考えるなら、いじめ、もしくは学校に行っていない、という理由が思い当たるが、その二つが当てはまるようには到底思えない。

もっと、込み入った事情の存在。

そういうものが見え隠れして、僕の不安を煽っていた。

込み入った事情を垣間見たのなら、訊かない方が礼儀として、作法として、正しいことなんだろうけど、それでも訊かずにはいられなかったのだ。

無礼であれ、なんであれ、放っておくことを、僕はよしとしない。できないんだ。

だから、和やかな雰囲気が悪れようと、僕は敢えて、真面目な顔付きで、そう切り出した。

「……………」

彼女は口を開かない。内山も空気を読んで黙っている。

絶対なにかある。そう確信が持てた。僕を撃ち抜いた弾丸。あれは見間違いないんじゃない。

少女が寒空の下で、誰も通らないような路地で、立ち尽くすのは、やはり、それなりの理由がある。

不自然さから生じる数々の違和感は、すべてを巻き込み、同じ結論に到着するように思えた。

「学校に行っていないわけでも、いじめを受けているわけでもないんですよね？ 僕にはそうは見えません。それなのに同年代と話すことが久し振りだなんて、どうということなんですか？」

僕は、彼女の口を開きたくて、質問に質問を重ねる。

「私は……あなたに謝らないといけません……」

彼女はゆっくりと重い口を開き、謝罪を宣言した。だけど僕は何に對しての謝罪なのか、理解できない。

状況を真面目に正確に捉えれば、僕が謝罪文を述べる方だ。

「私は、あなたを殺したんです」

「はい？」

僕は肯定の二文字の語尾を上げ調子にして、疑問の意志を示す。

一体この人は何を言っているんだ？

「じゃあ、あなたは何者ですか？」

僕はその質問に即答する。

「幽霊です」

内山のポカンとした間抜け面が、とても印象的だった。

「ごめんなさい、それは嘘なんです」

「いや、僕は確かに幽霊です」

「あっ……そうか……」

彼女は自身の左手の平を右こぶしで叩くという非常に可愛らしい仕草を行った後、アイマスクをゆっくりと外した。輝かしい瞳があらわになる。

「内山くん、ちょっと後ろ向いてくれますか？」

「あっはい!!」

そう言つて、こたつに内山が背を向けたのを確認したと同時に、彼女は僕を見つめてきた。

出会いの時と同じ目つきで、彼女は僕の目を奪う。

「あなたは、人間です」

「僕は幽霊です」

僕は即答で否定した。

「っえ？ ちょ、え？ なんで？ どうして？ もう一度言いますよ。

あなたは人間です」

「いやだから僕は幽霊です。あなたが言ったんじゃないですか」

今更のように慌てふためく桜井さんを、僕は不思議に思っていた。「いや、だからね、それは嘘なの。あなたは生きている人間でいいの」

「いや、人間でいいとかそういう問題じゃなくて、僕は幽霊ですって」

彼女にそう言われてから、僕は自己の認識を新たにしていた。

というよりも、以前から常にそうであって、過去から現在まで、それは依然として変わっていないくて、単に思い出した、気付かされた、という感覚に近いかもしれない。

「学……お前、なに言ってるの？ 桜井さんとネタでも仕込んできたの？」

内山が後ろを向いたまま僕に語りかけた。

「ああ内山ごめん。言い忘れてた。僕、一回死んでるんだ」

僕は確かに自己を幽霊であると納得したが、幽霊の定義が曖昧だった。

メディアを通して聞く、幽霊のイメージ。

怖い。

人前に姿を表さない。

浮遊している。

透けている。

だいたい、これくらいのことだ。

でも僕は地に立てるし、物に触れることができるし、友達がいるし、学校に通っている。

所詮メディアの情報なんて、人間が作り出したものだから信用できない。

だったら。

僕自身が幽霊だと言うのだから、僕に当てはまる特徴そのものが幽霊と言つことになるんだろう。

つまり。

僕の存在自体が幽霊の定義。

じゃあ人となにが違うのか？

違いは、どうあっても必要だろう。

それを考えたとき、僕は一つだけ、人間と幽霊にある決定的違いにいきついた。

生と死だ。

生きているか死んでいるか。その違いだけは切っても切り離せない。

だから僕はきつとどこかでもう死んでしまったのだろう。

そう『納得』したんだ。

山岡権人の人間性

?

2

山岡 権人

俺は隣で電波発言をしている悪友兼、親友である学に驚きを隠せないでいる。

だけど、桜井さんがなにやら説明を始めると言つので聴く姿勢を作った。

なぜかアイマスクを掛け直した桜井さん自身も、なにが何だか分からないと言つた様子で、「落ち着けー、落ち着け私」と言いながら気合いを入れている。

その後桜井さんは、話を脳内で整理するように、目線を誰もいなし上空に向け（いや実際アイマスクをつけているので目線を完全に把握できないが）、しばらく思考した後、口を開いた。

「内山くん だったよね。えっと……突然なんだけど、きみは、突拍子もない話を信じることができる人かな？」

どうやら突拍子もない話を始めたいらしい桜井さんに、そう問われた俺の返事は決まっついていて、

「はい。もちろん。というか俺は突拍子もない話しか信じません」と、答えた。できるだけオーバーに、桜井さんが気兼ねなく話せるように。

ついでに学がなにやら喋りたくて仕方のないような様子なので、学の口を手のひらで封じながら、桜井さんの突拍子もない話を待た。

こいつが口を挟むと話がややこしくなるからな。

「私って、可愛いでしょう？」

「はい」

どうやら、桜井さんは自覚があったらしい。

その質問に即肯定してしまった俺は、話の切り出しに、こんな質問を投げかけてきた意図を思案してみたのだが、どうやら答えは見つかりそうになかった。

「いや……今のは冗談です。魔眼って、信じますか？」

冗談の意図が全く分からない。

「桜井さんがあると云うなら信じますがけど、魔眼がなんなのか、よく分かりません」

「カリスマ……だったら分かるかな？」

「カリスマですか。それなら何となく分かりますね」

カリスマ。

宗教的見解で考えるなら、聖霊から与えられる特別な力。

現代、一般的な意味で用いるなら、多くの人を心酔させる能力。

どっちの意味にしる突拍子もない単語だ。

「カリスマは危険。内山くんはそうは思わないかな」

突然桜井さんの声のトーンが低くなって、重苦しい雰囲気醸し出した。

「よく分かんないですね。カリスマというものを、そこまで知っているわけじゃないんで……」

俺は丁寧な言葉遣いで、正直に桜井さんに話す。

そうすることで、カリスマについての危険性を桜井さんから詳しく聞ける気がしていた。

丁寧な言葉遣いよりも正直に話す、そこが大事だ。

「そう……カリスマってね、後天的なものじゃないから危険なの。先天的特性だから危険で恐ろしいの」

「後天？ 先天？」

そう言う話になるとは、全く予測してなかったので、俺の頭は混乱してしまった。

「そう。後天か先天か。そこに大きな差がある」

いまだ俺の手のひらで呻いている学を宥めながら、俺は桜井さん

の話を聴く。

「『民衆を束ねるにはカリスマが必要だ』『指導者に必要なのは、カリスマだ』そんな言葉が世の中で囁かれているでしょ？」

「はい。一度くらいは聴いた覚えがあります」

「それは嘘なの」

「何が本当なんでしょう？」

俺は、あくまでも下手から、多くの情報を聞き出せるように相槌を打った。

「人を導く人間に必要なのは、バランスと、共感……」

「バランスと共感ですか」

「どれだけ中立な立場を保てるか、どれだけ、民衆の納得を得るか。それに懸かっている」

「そしてバランスと共感は後天的である、と」

「内山くんは聞き上手なんだね」

「いえいえ、とんでもない」

ただの好感度ポイントを稼ぐのが虚しく感じてきたが、桜井さんに嫌われたら最後、立ち直れないと確信していたので、嫌われない程度に接しようと思った。

確信の理由は単純だ。

桜井さんがいい人だからだ。

素朴に、普通に、飾り気もなく、素直にいい。善人だ。そういう人から嫌われるのは、避けたい。

「バランスと共感、社会とどれだけ関わったか、どれだけの人を見て、感じてきたか、つまりは、努力の結晶。紛れもなく後天的でしょ？ 努力ありきの結果は信じられても、努力なしの結果は信じられない。そういう感じかな」

「なるほど。じゃあカリスマって、なんなんですか？」

「カリスマは洗脳なの」

「洗脳ですか」

また新たな単語が飛び出してきたので、俺は単語を復唱する程度

の相槌しか打てなかった。

聞き上手失格である。

「バランスと共感で得ることができるのは、民衆の納得。だから、最終決定をするのは民衆だよね」

「カリスマは違うんですか？」

「うん、正反対。カリスマで得ることができるのは、強制的な共感つまり洗脳だけ。納得を強制させる事ができる、催眠術のようなものなの」

「カリスマを持った人が発言すれば、考えもせず民衆は従うってことですね」

「そう……。だから危険。カリスマは本当に強い力だから。それはもう、超能力じみた力だから。使うことは自粛するべきなんだ」

依然として低いトーンを保っていた声は、更に今、低く響く。

「……桜井さんは、その力を使えるんですね？」

そうじゃなければ、こんな前振りはいらないだろう。カリスマの危険性を、まるで、自分を戒めるように語っていたのだから、容易に想像できる。

桜井さんは、大きな不安と悲しみ、それと、十字架を抱えている。学が有無も言わず桜井さんを連れてきた気持ち、少し分かった気がした。

「内山くんは、なんでもお見通しだね」

「話しを聞く側としては、これくらい昼飯前ですよ」

「お腹が空いてるんだね。内山くんは」

ボケたつもりだったのに、うまく返されてしまった。

「それで、学はどうなっちゃったんですか？」

「私そのカリスマを使って幽霊にしたんです。すいません……」

「いやいいですよ、こんな奴。けど、それまたどうして学で、どうして幽霊なんですか？」

「……内山くんは疑わないの？」

「何をですか？」

わざと白を切ってみた。

「カリスマの話だよ」

「疑いませんよ」

「どうして？」

「信じるしかないでしょう。学はここまで面白くもない冗談を言う奴じゃないですよ。それに、桜井さんがここで嘘を付いても仕方がない。意味がない。それに……、俺の入っている部活の顧問は、オカルト系の話ばかりしてますから。今更驚きません。本当にこんな事あるんだー。てな感じですよ」

「そうですね。なら」

と、そこまで言っつて、桜井さんは口を閉ざしてしまった。言い留まった。

体感時間五秒のカウンツの後。

「やっぱり だめです」

「どうしてですか!？」

「これを話したら、内山くんに迷惑を掛けることになる……」

どうしてだろうか？ 危険なものにあこがれる好奇心というものなのか、それとも、他人の事情に首を突っ込みたがるお節介精神なのか、彼女の悩みを解決したいと純粋に思っているのか、どれが今の俺の心情をうまく表しているのかは、分からなかった。ただ、放っておいてはいけないな、と。使命感のようなものをうっすらと感じたのだ。

「俺たちはヒーローになりたいんです」

俺は思いつく限りで、一番気の利いたことを言おうと思った。

「桜井さんは困ってるんですね？ なら助けられてください。俺たちは、ずっとヒーローになる機会を待っていたんです。協力、してもらえませんか？」

桜井さんの負担を軽くするための手段として、俺はそう言う。あくまで自分たちの利益のために知りたいのだと、そういう意味合いで話した。

でもこれは、あながち嘘ではない。
それはまだ記憶に新しい出来事。

月末近くで、バイト代を丁度使い果たした、先月の出来事。
たしか、みかんで三日間過ごした最終日の話だ。

* 十一月二十八日 月曜日

「流石にみかん飽きた」

あてもなく、独り言を吐いてみる。

みかんを食べ出して三日目。

三日前ダンボール二箱に入っていた、どう考えても食いきれそうにない量のみかんは、もうすでに数えるほどしかない。

「内山。元を辿ればお前が『すき焼きをしよう』なんて言うからこんなことになるんだ」

「なんだその微妙なモノマネは！ もう二度とするなよ。それに、すき焼きにはお前も賛同していただろう！」

先週。有り金を叩いて、すき焼きパーティーをってしまったのだ。お隣さんとか、クラスメイトとか呼んで まあ集まったのは俺と学を含めて四人だけだったけど。それはそれは楽しい夜だった。

で 実際楽しかったのはやはりその一夜だけで、そこからの一週間は地獄。バイトの募集人員が減るわ、学食で食中毒がでて閉鎖になるわで、食べ物に困った。

追い討ちのように仕送りがみかんだけという惨事。
せめてジャガイモをください。

「まあそうだけどさあ。これ以上、手が黄色くなるのは御免なんだよ。そう思うと、誰かの所為にせずにはいられないんだよね」

学は若干苛ついている。きつとカルシウム不足だ。

みかんばかり食べているせいだ。

つまりそれは俺のせいか。

「いや学。こうして月末に金欠になったり、仕送りにみかんしか送ってこない親がいたり、手が黄色くなったりさ。日本は平和だと思わないか？」

「内山お前、すき焼きの件を誤魔化そうとしてないか？」

「してない」

最近設置したこたつに足をうすぐめ、俺は真向かいの学にきっぱり言った。

半分本気で半分嘘だ。

学は不満げながら俺の質問に答える。

「いいじゃないか、平和で。日本は平和主義だし。欲張ってない」「欲張ってないってどういうことだ？」

「いや領土とか、権威とかだよ。欲張ってないだろ？」

「確かにな。けどさ、欲張らないのは国単位の話だけでいいと思うんだ。俺たち一般人は、平和ばけしている日常に満足してちゃいけない。そうは思わないか？」

「どうしていけないんだよ。平和でのほほんと過ごせばいいじゃないか」

「じゃあお前、このまま普通に卒業して、普通に就職して、普通に結婚して、普通にパパになって、普通に出世して、普通に老後を送って、普通に死ぬ。それでいいのか？ それでお前は満足なのか？」

「いや、満足だよ。普通に」

普通にあしらわれただけだった。だが俺は怯まない。

「いや駄目なんだよそれじゃ。俺たちの日常はもつと楽しくなくちゃいけないんだよ」

半ばやけになっていたのかもしれない。

「なんなんだよ、その論法は。根拠が分からないよ」

面倒くさそうにそういう学。

学は極めて冷静だ。

適当に喋っていたただけだけど、こうなると、どうしても説得した

くなる。

「いや楽しくなくてもいい。俺はな学。俺にしかできないことをやりたいんだ。生きた証を残したいんだよ。こんなところで、みかんを食べてる場合じゃないんだよ！」

「一回頭冷やしてこいよ、内山」

その哀れむような目をとりあえずやめてくれ。

「頭を冷やすのはお前だ、学。欲を持たなくなったら人間負けだぜ」
学はそこで少し眉を寄せ、何かを考えているように見えた。

「いや、ああ、そうだな。……ああ、うん。きつとそうだ」

「やつと分かったか、学」

どうやら納得してくれたらしい。

「ああ。僕も思ってたよ。どうせ生きるなら、誰かの人生を変えてやりたいって。それも、僕より長く生きる人の人生を、いい方向に変えてやりたい」

どこか遠くを見据えるような瞳を俺に見せつけ、学はそう言った。
「親友がいきなり優等生発言をしたらさ、なんかこう、殴りたくなるな」

「なんだよ内山。お前が言いたかったことって、そういうことだろ？」

「微妙に違う。そうだな、俺は世界を変えたい。世界を変えるくらい勢いで生きたい。誰かの記憶に残りてえんだ。できるだけ多くの人の記憶に残りたい、できれば善人として」

「なんだよ、できればって。最悪、悪党でもいいのか？」

「最悪、な。生きた証にはなるだろう。過去の戒め、教訓だよ。」
ああいう人になっちゃ駄目だよって』
どっかのお母さんが教えるよ
うな、そう言う人間になってもいいかなって」

「反面教師な汚れ役でもいいってか？」

「ああ。そっちの方が簡単そうだ。気持ちの問題だろ。汚れ役になるくらいは肝っ玉なら持ち合わせてるよ」

「全然そうは見えないけどね」

「そうか。お前の目は団子か」

「食べれるかな」

「いや、食べれるだろうけど、やめとけ」

「じゃ、みかんを食べよう。ほいっ」

そう言っつて学はみかんを投げた。

全速力で。

すごい手首のスナップを効かせて、投げた。

俺は突然の事態に、当然のごとくみかんをキャッチし損ね、みかんはそのまま、みぞおちにダイレクトヒットした。

呻き苦しむ。

咳き込み混じりの呻き声だった。

「あつすまん」

棒読みの学。

「……すまんじゃねえよ。どう見たって犯罪者の顔だよお前……、確信犯にも程があるよ」

俺はこたつに顎をつけ、上目づかいで学にそう言った。

「汚れ役つてのはこう言うことだよ。どうだ、内山の目に写る僕は醜いだろ。お前はこんな奴になりたいのか？」

学は、どや顔である。

「なぜに誇らしげだ！ もっともらしい理由をつけて、みかん投げたかったただけだろうが！」

「つち、ばれたか」

「てんめえ。許さねえ」

俺はこたつの上のみかんを取り、距離をとる。

学も俺と同様の動きをとった。

わずか四畳半の部屋で果たして意味のある行動かは分からないが、最大限の距離をとった。

「やるな学」

「やるな内山」

そう言っつて同時にみかんを投げつけた。

二つのみかんは真っ直ぐ相手目掛けて進み、そして、互いに吸い寄せられるように、衝突した。

それは、ストップモーション。

皮が弾け、果汁が飛び散る。

幻想的な光景がそこにはあった。

だが、学の脳裏によぎったことは俺と一致していて、『綺麗だ』なんて言葉じゃないんだろう。

『食料が費えた』

まさしくこれだ。

投げたみかんが、最後の二つだったのだから。

「ビタミン源がー！」と、俺。

「空腹緩和剤がー！」と、学。

「どうしてくれんだよ！ 仕送りくるまで後丸二日あるんだぞ！」
学が威勢よくそう言う。

「いや、お前から始めたんだろうが！」

「つべこべ言うな！ 秘技、こたつ返し！」

卓袱台をひっくり返すように、こたつをひっくり返した学。

こたつが四畳半の空間を旋回したおかげで、部屋は酷いあり様だ。

学の必殺技が炸裂したことによって、事態は終焉した。

俺は破壊衝動に支配された学を刺激するほど馬鹿ではないのだ。

「どうどうどうどう。落ち着け学。落ち着いて、それから協力して部屋を片付けよう」

「……………」

「大丈夫かー？」

俺は異次元に意識が飛び立っている学の目の前で、手をぱたぱたさせる。

「つは。……………うん、ああ、なんか、ごめんなさい」

「いや、俺も悪かった。すまない。さっさと片付けて、今日はもう寝ようぜ」

*

という、男子高校生の悪のり。
だが、勘違いしてはいけない。

こんなくだらない喧嘩のような寸劇は、毎日繰り返されているわけであって、この時に限って行われたイベントではないと言うことだ。

それでもこの日が記憶に残っているのは、きっと、冗談の中に互いの本音を覗いたからだろう。

高校生にありがちな、互いの夢を語るという恒例イベントを同時に行っていたわけである。

俺は、こたつを元通りにしているとき、こんな会話を交わした覚えがある。

「つまりさ、内山。僕もお前も、ヒーローになりたいわけだよ。英雄になりたいんだ」

「そういうことなのか？ でもヒーローってどうやってなるんだよ」

「さあ？ 日本は平和だからね。簡単にはなれないんだろうな」

「いや、案外そこら辺に悪は転がってる。きっと」

「見つけた時は、独り占めなんてなしだからなー」

「ああ分かった。そんな時は、お互い様だ」

* 十二月二十八日 水曜日

「命が懸かっているとしても……………ですか？」
桜井さんがそう言い終えた瞬間だった。

俺に力の限り押さえつけられていた学が、急激に戦闘能力を上げたのだ。

結果的に俺からの拘束を抜け出し、学は自由の身となった。

こうなってしまうては、学のお喋りを止めることはできない。

「そんなの関係ないですよ」

俺は学の意見に肯定することはできなかつた。

命が懸かっているだつて？

そんなことに足を突っ込んでいいのか？

片足が入った時点でもう抜け出せないんだぞ？

俺は葛藤する。

「僕はもう死んでいますから、命が懸かっつていようと関係ないんです。余生で人助けができるなら本望ですよ」

学はまたそんなことを言っていた。桜井さんのカリスマというのは、どうやら本当に凄いものらしい。

死んでいると思ひ込んでいる学だから、質問には即答だったけど、俺はまだ、答えることができないでいる。

『命が懸かっている』

その言葉が頭から離れない。

それは、死ぬ可能性があるということだろう。俺は死に危険を冒してまで、危険という名の非日常を楽しみたいと思つているのだろうか？

桜井さんを助けたいと、思つているのだろうか？

桜井さんは、赤の他人だ。

俺には何の関係もない。桜井さんに不幸が襲い掛かつても、俺は心を痛めないだろう。

いや、本当にそうか？

命が懸かつているということは、桜井さんもまた、命の危険を感じているということなのではないだろうか？ 一寸先は死。そんな、危ない橋を渡つている最中なのではないだろうか？

俺がここで、赤の他人だからと言つて、これ以上首を突っ込まず、

桜井さんに帰ってもらったとしよう。それで、俺が見捨てたことが原因で、明日にでも桜井さんが死んだとしたら？

俺はなんとも思わないのか？ 赤の他人だから関係ないと、そんな客観的に思えるのか？

後悔、しないのか？

「ヒーローは、自分の都合を考えて、助ける相手を選んだりしません」

後悔しないわけ、ないじゃないか。

正直ヒーローになりたいとか、そんなのはどうでもよかった。けど、こうでも言わないと、死の恐怖で、自分がやりたいと思っていることすらできない。

なら俺は、ヒーローを演じよう。

それがここ数年で俺が外山がいやまから学んだことだ。

「本当に死ぬかもしれないんですよ。なんで見ず知らずの私なんかを助けようとするんですか！」

「困っている人を助けることに、理由なんていりませんよ。困っている人を見捨てる勇気のほうが僕にはない」

何の恥ずかしげもなくそういう学は、やっぱり凄い奴だと思う。

残念ながら俺は、理由もなしに、命を懸けるなんて真似はできない。

どこかで正当な理由 自己利益を求めてしまう。

学にその気はないだろうが、そういう見返りを求めない正義が、どこか偽善者っぽく見えて、俺はそういうのが嫌いなんだ と思う。

他人がそうあるのは一向に構わないのだけれども、自分がそうなるのには抵抗がある。

『お前はそんな善人じゃないだろう？ なに善人ぶってやがる』そんな声が、どこからともなく聞こえてくるんだ。

「桜井さんが何を抱えているか知りませんし、役に立てるのかも分かりません。けど、俺たちは、あなたの役に立ちたい。それはただ、俺たちがそうしたいだけなんですよ。桜井さんがそのことについて、

気に病むことはないんです」

俺はあくまで、自己利益のために動く。俺が、自分の行動に後悔しないように、最後まで自分に正直だったといえるように生きる。

そう自分に言い聞かせながらも、桜井さんには俺たちが行うことは単なる自己満足でしかないことを理解してもらいたかった。それを知ってもらい、桜井さんの負担を軽くしようとした。

「は」

桜井さんは小さく息を吐き出した。胸を撫で下ろしたのだ。

どうやら、思惑通り正しい意味で情報が伝達されたようである。

そして、小さく息を吸った。

「……今日は、ここに来てよかった。なんの巡り合わせかわかんないけど、本当によかった。私の話を信じて、助けさせるなんて言う人、この世界にあなた達しかいないよ。馬鹿なんですか、お二人さんは。馬鹿だよ本当に……馬鹿」

桜井さんは照れを隠すように馬鹿を連呼する。その声は少し涙ぐんでいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7552y/>

絶対彼女

2011年11月24日01時45分発行